



浮かぬ顔



川崎ゆきお

「浮かぬ顔だな」

「こんな顔なので」

「それは損だな」

「はい、損です」

「気持ちが沈んではおらぬか？」

「今ですか」

「そうじゃ」

「ふつうです」

「ふつうでそれか、標準が浮かぬ顔か」

「はい、まあ」

「気持ちと顔は別なんだな」

「そうかもしれません」

「気持ちが顔に現れるというのは嘘なんじゃな」

「さあ、それは、どうですか」

「だって、君はいつも浮かぬ顔じゃないか。そんな気持ちでいる訳じゃないだろ」

「はい、そうです」

「では、ウキウキしたときの顔はどうなる」

「顔は浮きません」

「張り切ったり、喜んだり、などの顔はどうなる」

「あ、目が多少大きくなったり、喜んだときは、目が三日月のようになるかと」

「じゃ、変化はしておる。それで、浮かぬときはどんな顔になる」

「眉間に皺が寄ります」

「ううん、それでは単純な合図を送っているようなものだなあ」

「いえ、別に、そんなもの送る気はありません。自然とそうなるんでしょうねえ。いちいち鏡で見えていませんから、よく分かりませんが」

「気持ちが顔に出ぬか？」

「出ていると思いますが」

「しかし喜んでいるときでも、その浮かぬ顔から、それほど変化はないのだろ」

「はい。眉間に皺が寄らなくても、浮かぬ顔に見えてしまうようです」

「困ったねえ、分かりました。それにふさわしい部署に行けるようにしましょう」

「ありがとうございます」

「気持ちのこもった表情というのは当てにならんようだ」

「はあ、何ですか」

「君を見ていると、感情と表情は別なようだ」

「あ、はい」

彼は浮かぬ顔をした。しかし、表情から受ける感じは変わらない。

了